台大日本語文研究第 41 期
2021 年 06 月，頁 1-20
2021-03-20 收稿，2021-05-30 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202106_(41).0001

浮游記憶的深處：論石黑一雄《群山淡影》

林淑丹*

摘要

石黑一雄首部長篇小說《群山淡影》以日本做為故事的舞台，發表後受到文壇極大的迴響。

故事利用悅子，回想她昔日在長崎的時光，惟目前她人已在英國。不過悅子回憶自己在長崎生活的份量比較少，卻把重心放在她朋友佐知子和後者女兒萬里子身上的較多。這對母女曾目睹二次大戰期間的暴力和殺子的行為，使她們留下記憶的傷痕，即使戰後這些創傷依然存在。

本文發掘重要人物微妙的角色結構，探究他們在社交互動中多重和多層面的特性。利用心理分析的角度，檢視佐知子逃離戰後日本的心理，不管其女兒家園被拔根的感受，從而用類比的方式重組悅子的生活型態。在本小說裡，戰時憂傷和漂流不定的痛苦扮演了吃重的情感部分。若是故事中人物被迫要移徙到另一國家，漂流、不安定和身分認同的反思會加劇惡化。故事在深層結構裡，這些元素成了石黑敘事和描畫的關鍵部分。這種相隔多層的淡化反射技巧造就了石黑一雄的「日本性」。

關鍵詞：戰爭、跨國、漂流、記憶、「日本性」

* 文藻外語大學日本語文系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

In the Depth of Drifting Memory: Ishiguro's A Pale View of Hills

LIN Shutan*

Abstract

Kazuo Ishiguro's first novel *A Pale View of Hills* makes its setting in Japan. There were tremendous and positive responses soon after its publication.

The story capitalizes on Etsuko's reminiscences of her previous stay in Nagasaki though now she is living in the U.K. Yet Etsuko recalls little of her own life but more of her friend Sachiko and the latter's daughter Mariko. Both the mother and daughter have witnessed the violence and killing of one's own child during WWII which left a deep scar in their memory. Even after the war, their trauma continues.

This article probes into the intricate construct of the characters, investigating the social interaction of the multi-level and multi-nature of the main characters. Through psychoanalytic views, Sachiko's yearning to escape the aftermath Japan despite the uprooted feelings of her daughter is reconstructed to reflect the *modus vivendi* of Etsuko. Since war time distraught and drifting pains play an important role in the narration, most Japanese have been affected. The drifting in life, agony and reflection of identity aggravate when one is compelled to move to another country. At a deep level these elements form a crucial part of Ishiguro's narrative portrayal. Such reflexive "paling effect" offers some notions to Kazuo Ishiguro's "Japaneseness."

* Professor of Japanese Department, Wenzao Ursuline University of Languages

臺灣大學學術期刊資料庫

Key words: War, Transnational, Drifting in life, Memory, “Japaneseness”

臺灣大學學術期刊資料庫

浮遊する記憶の深淵
—カズオ・イシグロ『遠い山なみの光』

林淑丹*

要旨

『遠い山なみの光』はカズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro）の長編第一作である。日本を舞台にしたこの作品は発表以降、文壇で大きな反響を呼んだ。

作品は現在イギリスに在住する日本人女性の悦子が、戦後まもない長崎にいたころを思い出すというものである。悦子の長崎の追憶は、彼女自身の暮らしよりも、友人の佐知子親子の日常が中心となっている。この親子が戦時中目撃した、女性がわが子を殺害するという衝撃的な事件は、彼らの記憶に深い影を落とす。また、こうした戦争の記憶は、戦後に不幸な形で再演される。

本稿では、重要な登場人物の微妙な人物造型を分析し、彼らの社交関係よりその多重的な性質を解明した。また心理分析の観点から、悦子が娘のよりどころのない気持ちよりも、自分自身の日本から出たい気持ちを優先する心理を検証し、悦子の生活を再構築した。作品では、戦争のトラウマと浮遊する不安定さが重要な感情表現となっている。自らの意思に反して祖国を離れることは、漂流、不安定感とアイデンティティの問題に直面する。物語の構造の深層でこれらの要素はイシグロの創作の焦点となっている。そして、そうした重層化したかすかさの反照の技巧は、イシグロの「ジャパニーズネス」を構築したものだと言えよう。

* 文藻外語大学日本語学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

キーワード：戦争、トランスネーション、漂流、記憶、
「ジャパニーズネス」

臺灣大學學術期刊資料庫

浮遊する記憶の深淵
—カズオ・イシグロ『遠い山なみの光』[1]

林淑丹

一、はじめに

『遠い山なみの光』（原題：*A Pale View of Hills*）は、二〇一七年にノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro, 1954-）の処女作である。カズオ・イシグロは長崎出身で、幼いころ日本人の両親とともに一家でイギリスへ移住した。日本を舞台にしたこの作品は、一九八二年の発表以降、とりわけイギリスの文壇で大きな反響を受け、英国王立文学協会賞（Winifred Holtby Prize）を受賞した。同賞は、英国および英連邦の市民権をもつ作家によって英語で書かれ、その年に出版された小説のなかで、もっともすぐれたものに与えられる文学賞である。彼の作品の文学的価値は世界に認められ、そのすぐれた貢献で、一九九五年に大英帝国勲章、一九九八年にフランス芸術文化勲章、二〇一八年に日本の旭日重光章をそれぞれ受賞している。

カズオ・イシグロは、翻訳しか読まない読者を十分に意識して、小説を書く際には翻訳しづらい文型の使用を避けているという[2]。したがって彼の文章は読みやすい。実際に原文と日本語訳を比較して読めばわかるように、日本語訳は原文にかなり忠実に訳されている。『遠い山なみの光』が刊行されてから、現時点ですでに九カ国語に翻訳されている。日本語版は、原書が発表されてから二年後の一九八四年十二月に、小野寺健の翻訳によって出版された。同作品の日本語訳は、現在にいたっても小野寺版のみである。以下、本稿の引用は日本語訳による。

[1] 本稿を草するにあたって、審査委員から貴重なご意見、有益なご助言をいただいたことに、心より厚く御礼を申し上げます。

[2] 斎藤兆史（2003）『英語達人塾——極めるための独習法指南』中公新書。

臺灣大學圖書館資料庫

『遠い山なみの光』は、英国に在住する長崎出身の悦子による回想を主とした物語である。イギリス人と再婚した悦子は、長女の景子の自殺に直面し、最初の夫と暮らした戦後まもない長崎での日々を追憶した。長崎にいたときに、悦子は佐知子とその娘の万里子と知り合った。佐知子はアメリカ兵のフランクと交際中で、彼が自分と万里子をアメリカに連れて行ってくれると信じている。小説は悦子の一人称で描かれており、現在のイギリスと、回想のなかの長崎が交錯する。しかし、小説の大半を占める長崎の回想は、悦子自身の生活よりも友人の佐知子親子の日常が中心となっている。

二、問題の所在と先行研究

『遠い山なみの光』について、多くの先行研究は作品の記憶問題をめぐって論じられている。たとえば Rebecca L. Walkowitz は、悦子の記憶は、東洋という抽象化された場所の反復「らしき」ものだと語っている[3]。しかし、ここでいう東洋とは何だろうか。たんに長崎という作品の舞台を根拠に、東洋という概念を抽象化してしまうおそれがある。まして抽象化された場所の反復は、悦子の日本への記憶を十分に説明したとは言えないであろう。Sean Matthews は、この作品は悦子の深刻な思い出の発散と解消なのだ、と述べている[4]。Cynthia F. Wong は、イシグロは読者が悦子と佐知子の関係について混乱することを期待しているという[5]。一方、日本ではたとえば平井杏子は、悦子が記憶している長崎と、当時の長崎の風景との相違を検討し、イシグロの誤りなどを指摘した[6]。台湾では李有成が、悦子の記憶を通して、この作品のカズオ・イシグロに対する意義を分析した[7]。イシグロは明らかにこの作品により、しだいに薄くなる故国

[3] Walkowitz, Rebecca L. “Cosmopolitan Style: Modernism beyond the Nation.” New York: Columbia University Press, 2006.
[4] Matthews, Sean., Groes. Sebastian. ed. “Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives”. Continuum, 2009.
[5] Wong, Cynthia F., “Kazuo Ishiguro”. 2nd ed. Northcote, 2005.
[6] 平井杏子（2011）『カズオ・イシグロ――境界のない世界』水声社、15-43 頁。
[7] 李有成(2008) ‘Reinventing the Past in Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills*’、『長庚人文社會學報』1、19-32 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

日本の記憶を新たによみがえらせようとしたのだ、と語っている。

記憶の問題のほか、荘中孝之は物語における湿地というモチーフの働きを検討し、行き場のない女性たちにとってそれが安らぎの避難所でもあると指摘する[8]。Wai-chew Sim は、フランクに見捨てられる佐知子の『蝶々夫人』との類似を指摘している[9]。アジア人女性が白人の男性に裏切られる、という設定に着目すれば、この作品は『蝶々夫人』と重なる部分がある。しかし、作品の核心にせまる悦子と佐知子母娘との関係性や、佐知子親子の人物造型などから考えれば、この作品は『蝶々夫人』よりも複雑な、アイデンティティ構築の問題やトランスナショナリティの要素が内包されている。

悦子の記憶の錯乱はいかなる意味をもつのか。悦子の日本からイギリスへの移動は、単純に国境を越える移民にとどまらない。それは彼女の国際移動に戦争の要素が取り組まれているからである。それと関連して、悦子のみならずその娘も、イギリス文化と日本文化のはさまに揺さぶられている。とりわけ、娘の景子は国境をまたぐ過程で新しい家族関係の構築に強く抵抗していた。そこでは彼女の越境という課題が、日英文化の調和や家族問題、そして彼女自身の生命との対峙にまで発展する。

本稿では、前述した先行研究をふまえつつ、登場人物の多重構造に焦点をあてて、戦争というテーマがこの作品でいかなる形で描出されたか、について探りたい。そして、イシグロが作品で描いた「ジャパニーズネス」はいかなるものかを追究したい。

三、重層化する「悦子」たち

『遠い山なみの光』は悦子の一人称で描かれている。イギリス人と再婚し、イギリスに在住する悦子は、日本敗戦後の、混乱をまだ引きずりながらも少しずつ復興への道を歩みだしたころの出来事を

8 荘中孝之（2018）「記憶の奥底に横たわるもの――『遠い山なみの光』における湿地」『カズオ・イシグロの視線』作品社、13-34 頁。

9 Sim, Wai-chew. “Globalization and Dislocation in the Novels of Kazuo Ishiguro.” New York: Edwin Mellen Press, 2006.

臺灣大學圖書館期刊資料庫

追憶している。なかでも、そのときに知り合った佐知子母娘との深いかかわりは、話の大半を占めており、物語世界の中核となっている。

物語は、イギリス在住の悦子が長女景子の自殺に直面した直後、次女ニキが家に帰ってくるところから始まっている。ニキの来訪をきっかけに、悦子は長崎で暮らした日々を思い出す。しかし、その記憶は、友人の佐知子とその娘の万里子のことがほとんどであった。しかも、その記憶は断片的であり、最後に悦子自身は「記憶というのは、たしかに当てにならないものだ」(『遠い山なみの光』小野寺健訳、早川書房、2017 年 10 月、221 頁、以下同)とすら語っている。言い換えれば、悦子の記憶には虚構の部分も混在しているのである。物語は、佐知子母娘の思い出話のあとに、悦子のイギリスの家での描写に戻るというように、過去と現在が交錯して描かれている。

ニキの滞在三日目に、親子は喫茶店へ行く。途中、公園で遊ぶ一人の女の子を見かける。「ニキとわたしは村まで散歩に出た午後、その女の子がブランコにのっているのを見たのだった」(64 頁)という。そしてその夜から、悦子はその女の子の夢を見るようになる。「初めは何の罪もない夢としか思えなかった。ただ前の日に見た――公園で遊んでいた小さな女の子の――ことを夢に見ただけだと思っていた。ところが、あくる日の晩も同じ夢を見た。それどころか、この二、三カ月に、わたしは何度もその夢を見たのである」という。公園で遊んでいた女の子と、夢に出てくる女の子は、なぜ悦子の胸騒ぎを引き起こすのか。

物語では、この夢の話が、長崎で知り合った佐知子と万里子の話を思い返したあとで語られている。このことから、公園で遊んでいた女の子と、夢に出てくる女の子によって、悦子が万里子を連想したことは明白である。悦子の語りでは、公園で遊んでいた女の子と、夢に出てくる女の子とが、万里子に結び付けられているのである。そして、のちの景子とも関連して物語の展開に伏線を張る。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

また、彼女の語りでは、現在と過去が同じ次元で語られている。イギリスと日本という場所の違いのみで、悦子の追想では、現在のイギリスが過去の長崎と同じ時間帯にあるかのように語られている。つまり、悦子の回想世界では、分割して交錯しているのは空間だけであり、過去のことも現在のことも同じ時間帯で行われたことのようだ、となっている。

しかし万里子に関連することは、なぜ悦子に胸騒ぎを覚えさせるのであろうか。万里子の話はあくまでも悦子が意識的に語ったものであり、彼女の記憶は必ずしも正確とは限らない。物語では悦子自身の娘よりも、むしろ佐知子と万里子が中心になって述べられている。悦子の追憶では、佐知子は戦前名家の夫人だったらしい。悦子と知り合ったときは、荒れ果てた空き地の外れの古い小屋に住んでいた。悦子と佐知子母娘の交際のなかでも、悦子は異常なほど万里子に関心を寄せていることに注目に値する。たとえば、物語の最初から、悦子は妊娠しているにもかかわらず、知り合ったばかりの佐知子と一緒に家出した万里子を探しにいく。

「夫は、よせというようにわたしを見て」「もう暗いよ」と言い、義理の父親からも「気を付けるんだよ、悦子」（48 頁）と言われても、悦子は躊躇することなく出かけた。また、別の夜に万里子が外へ飛び出したときには、「そろそろ万里子さんを探しに行かない？」という悦子の質問に対して、佐知子は「いいのよ」、「すぐ帰ってくるわ。外にいたいんなら放っといてやって」と答えている。ここから、母親の佐知子よりも、悦子のほうが万里子のことを気にかけているように見える。

また佐知子が「わたしにとっていちばん大切なのは、娘の幸せなのよ」、「娘のことを第一に考えなきゃならないの」（122 頁）と語るシーンのあとは、景子の話に変わり、景子を偲ぶ悦子の心境が語られている。景子の家出に対して、「あれほど激しく反対したのも、景子を守ってやりたかったからにすぎないので」（125 頁）あり、「いつも景子の幸せが心配だった」と想起する。ここで佐知子の娘に対

臺灣大學學術期刊資料庫

する思いは、意外にも悦子の景子に対する心境と重なり合う。

さらにもっとも注目すべきなのは、つぎの二点である。

第一は、物語の最後の、アメリカに行きたくなくて家から飛び出した万里子に対する悦子の言葉である。冒頭のシーンと同様、母親の佐知子ではなく、悦子のほうが万里子を探しに行く。そして見つけた万里子に、悦子は「その男はあなたが大好きなんだから。新しいお父さんのようなものよ。きっとみんなうまくいくわ」、「とにかく、行ってみて嫌だったら、帰ってくればいいでしょ」（245 頁）と諭す。しかし、万里子に話している、「その男は」佐知子によって語られるだけであり、作品中に一度も登場していない。そのため、悦子にも読者にも「その男」が万里子のことをどう思っているか知るすべはないのである。悦子のここでの話し方は、おばさんが友人の子どもに話しているというよりも、母親が子どもを説得しているように見えるのではないだろうか。

さらに重要なのは、この説得シーンの直後に、イギリスでの悦子とニキとの会話に戻ることである。悦子は、長崎にいる万里子に「新しいお父さん」を引き受けるように説得するのと同じ調子で、イギリスの家に帰ってきたニキに、つぎのように述べている。「あのころだって、こっちへ来れば景子は幸せになれると本気で信じていたのよ」と。さらに、「でもね、ニキ、わたしには初めからわかっていたのよ。初めから、こっちへ来ても景子は幸せにはなれないと思っていたの。それでも、わたしは連れてくる決心をしたのよ」と続く。ここからも、悦子は長崎の過去の情景と、イギリスの現在を結びつけていることがわかる。要するに悦子の語りは、長崎での万里子に対する説得がイギリスにおける景子へのそれにつながっており、幼いときの景子を説得するようなのである。換言すれば、日本にいた万里子はイギリスで大きく成長した景子と重ね合わさられているのである。

第二は、悦子がニキに話した長崎の思い出である。物語ではまず佐知子が万里子を連れて、悦子と三人で長崎へ旅行したことが語ら

臺灣大學學術期刊資料庫

れた。「港の音は、ケーブルカーの駅がある広場のベンチに座っていても、まだ風にのって聞こえてきた」（145 頁）。「わたしたちはしばらく座ったまま、ケーブルカーが昇ったり降りたりしている光景をうっとり眺めていた」という。しかし物語の結末に、悦子はニキにつぎのように言い表す。日本での日々をよく思い出し、長崎の港へ行った「あの時は景子も幸せだったのよ。みんなでケーブルカーに乗ったの」（傍点引用者）。悦子は「わたしは今朝、一度あそこへ遊びに行ったときのことを思い出していたのよ、日帰りで。港の上の山はとてもきれいなの」とニキに言う。

この話から、悦子が長崎の港へ旅したのは生涯で一度だけであったと理解できる。しかし、先に悦子の語った三人の長崎旅行の時点では、景子はまだ生まれていない。ということは、前に語った佐知子母娘と三人で行った長崎の旅は、現実においては悦子自身と景子母娘の長崎の旅の経験であり、「あの時は景子も幸せだった」ということになるのである。つまり、悦子の回想世界では万里子はすなわち幼少時期の景子だったのである。

要するに、物語では万里子とは景子の子ども時代の具現化だと考えられる。また、イギリスに移住した景子は結局家から飛び出して、一人マンチェスターで暮らす。景子の家出には、小さい万里子の影が落とされている。悦子の追想では、万里子の家出がイギリスで育ち上がった景子の家出とも重ね合わせて語られている。つまり、万里子はすなわち景子の幼いころの面影なのではないだろうか。言い換えれば、悦子の追憶で語られた万里子は、結局景子の身代わりなのである。そして佐知子もすなわち悦子自身の影の一部なのである。

イシグロは、佐知子とその娘は悦子にとって重要だと述べる。それは、「なぜなら彼女は自分自身について語るために彼女らを利用することができるから」[10]だという。では、悦子はいかにして佐知子母

[10] Mason, Gregory. ‘An Interview with Kazuo Ishiguro.’ Shaffer, Brian W., Wong, Cynthia F. ed. “Conversation with Kazuo Ishiguro.” UP of Mississippi, 2008, pp.3-14.

臺灣大學學術期刊資料庫

娘を「利用」したのか。それは前述した先行研究のいう、イシグロは読者が悦子と佐知子の関係について混乱することを期待している、ということにとどまらないであろう。また、ほかの先行研究のいう過去の追憶だけでもない。悦子は佐知子親子の姿を「利用」して、自己の内面の深層を探求してもいるのである。なぜか。

物語の冒頭、記憶のなかの万里子について言及された直後、舞台はイギリスの現在に戻り、公園でブランコにのっている女の子から夢に出てくる女の子まで、話の焦点はつぎつぎと移っていく。そういうなかで、悦子の語りから、万里子のことは、いつまでも彼女の心に引っかかっていることがわかる。

さらに前述したように、佐知子の、家出した万里子を探さなくていいという言い方は、アメリカへ行くのは万里子のためだという説と矛盾している。このことから、悦子にとって、佐知子がフランクとの恋情ばかりに関心を寄せて、万里子を疎かにする姿勢は、悦子が過去に犯した過ちの表われだと言えよう。換言すれば、悦子にとっての佐知子は、すなわち悦子自身の過去の誤り、失敗の表徴なのではないか。

四、戦争の呪縛

『遠い山なみの光』では、物語の最初から、悦子の語る佐知子と万里子の話のなかには、戦時中、佐知子と万里子が東京で目撃したわが子を殺す女性のイメージが挿入されている。事件の女性は物語の第一章から言及されており、悦子の追憶に深い影を落としている。この女性は物語であまり言及されていないが、物語世界にかかわる重要な中心人物となっている。

万里子の認識では、事件の女性は長崎現在の川の向こうに住んでいるおばさんであり、「ゆうべ家へ来たの。お母さんがいないときに」（21頁）と述べている。しかし、川の向こうには誰も住んでおらず樹林のみである。このように、物語の最初からこのおばさんは謎めいていて、幽霊かと思われる人物として提示されている。

臺灣人學學術期刊資料庫

それから、万里子が木から落ちた事件のあと、悦子は佐知子からそのおばさんのことを知らされる。戦火のなかの東京で、ある日万里子はある女の人を目撃した。彼女は「肘まで水に浸けて跪(ひざまず)いて」、「ふりかえって、万里子ににっこり笑った」という。そして女は「両腕を持ち上げて、水の中に浸けていた」赤ん坊を万里子に見せたあと、彼女自身も喉を切って自殺してしまう。「東京ではほかにもいろいろずいぶんこわいものを見てるんだけど、いつでもあの女の人のことしか思い出さないの」（103 頁）と佐知子は補足している。

戦時中に目撃したこの衝撃的な事件は、幼い万里子に多大な影響を与えたに違いない。それ以降何年経っても、万里子は普通の子どもと異なりしばしば家出する。ある日、彼女がまた家から飛び出し、川の向こうの森の木の下で倒れているところを佐知子と悦子に発見される。しかし、そのときの佐知子の反応は興味深い。佐知子は「じっと佇んだままそれを見て」おり、悦子を「ふりかえった目は、奇妙な表情をたたえていた」（54 頁）というのである。佐知子の反応から、倒れこんだ万里子は単純に木から落ちたのではないことに、彼女は気付いていると推測できる。彼女は「黙ったまま、まるで人形のような、こわれやすいが感覚のないものでも扱うように、娘を両腕にかかえて調べていた」（55 頁）という。佐知子が冷静に万里子の傷を確認する姿勢は、そのときが初めてではないように察せられる。

悦子の回想では、万里子が木から転落した事件のあとで、佐知子から先述の事件の女性の話が語られる。したがって佐知子の冷静な姿勢からしても、万里子の転落事件は、あの事件の女性と無関係ではないだろう。すなわち、万里子は実際に木から落ちたのではなく、自殺を試みたのだということに、佐知子は気付いていたと考えられる。

さらに、二人が万里子を発見したときの描写も注目に値する。「暗くなってきた中で土手のやや下手に転がっているもののほうを二人で見ていたときの、呪いにかかったような不気味な気持ちは、かな

臺灣大學學術期刊資料庫

りはっきりおぼえている。やがてその呪いがとけると、二人はそろって走りだした」（傍点引用者）と、悦子の追憶が語られている。ここで描き出される「呪い」は、万里子を始終縛りつけている戦争の呪縛だと推察される。そして、こうした戦争暴力の呪縛には、悦子も佐知子も束縛されているのだと言えよう。

万里子は東京の事件の女性のように自殺を試みたが、失敗して木から転落したのであろう。そして、万里子のこのような自滅行為は、のちイギリスに移住していた景子の首つり自殺によって繰り返されている。つまり、景子の自殺は、戦争中に自死した女性のイメージの反復だと言えよう。東京・長崎で起きた戦争の陰影は、数年後も消去されることなく、異国に越境して平和な生活に戻っていても引き継がれているのである。こうして、戦争の傷痕と暗黒が、成人した景子をいつでも呪縛しているのではないだろうか。

一方、幼い景子、すなわち万里子の自殺行為は、悦子が景子の死後、前述した実際に公園で見たブランコにのっている女の子や、夢に出てくる女の子にも関連している。悦子の語りでは、佐知子の経験に悦子の投影が見られるためである。したがって、「その女の子はブランコになんかのってないの。初めはのってるみたいな気がしたんだけど。でも、のってるのはブランコじゃないの」という描写は、幼少時代景子が木から転落した事件を暗示しているのではないだろうか。

一方、万里子は学校へ行かない。「学校へ行かなくていいの」という悦子の質問に、「彼女はちょっと黙っていたが、やっと「学校へは行かないの」と言った」ように、万里子の不登校は心の闇となっている。彼女は国家の教育制度、システムと一体化できず、そこから排除されている。万里子は友だちもおらず、つねに別の子どもと喧嘩している。また、万里子は家にも居場所がない。明け暮れひとりで目的も意欲もなく外で彷徨い、よりどころがなく不安定な生活をしている。加えて佐知子に、「フランクさんなんか豚のおしっこだ。泥んこの豚だ」と述べる万里子は、フランクを甚だ軽蔑し、極度の

臺灣大學學術期刊資料庫

嫌悪を示している。人々が憧れているアメリカ行きに対する意欲が見られない。

さらに、ニキが「パパは、もうすこし姉さんのことを考えてあげるべきだったんじゃないかしら。ほとんど相手にしなかったでしょう。あれではひどいわよ」と言うように、国境を越えてイギリスに移動した景子は、イギリスの新しい父親に受け入れてもらえない。

景子は子どものころから学校システムから除外されており、国境を越えても、いわゆる「家族」から隔絶されて、孤独な隔離におかれている。のみならず、異国で日本というアイデンティティの揺れから、ひきこもりを選び、社会からも排除されている。学校から、家族から、社会からも排除されており、精神の安定を失ってしまう彼女の越境体験は、異なる文化の不調和と漂流する孤独感のみである。最後に生きる権利を放棄し、この世を去る道を選ぶ。彼女に始終家もなく、浮遊して漂泊したまま一生を終えているのである。

悦子の過去の失敗の反映である佐知子も、万里子と同様に物理的にも精神的にも居場所がなかった。佐知子は万里子の世話よりも、フランクとの恋情ばかりに気を取られている。アメリカに行くことは万里子のためだ、と頻繁に述べる佐知子の姿には、悦子の内面が深く反映されている。それなのに、悦子は結局景子を死に追いやった犯人になってしまう。さらに言えば、悦子は、東京で子どもを殺害した女性のイメージを反復し、その女性の姿とも重なり合っているとも言えよう。

『遠い山なみの光』では、誰もが景子のように終戦後も戦争の呪縛、トラウマから脱出できないまま、心当てがない暮らしをしている。さらに日本と異国のアイデンティティ形成のはさまに浮遊して、現実世界に浮いたり沈んだりしているのである。

五、「ジャパニーズネス」のかく乱

イギリスの批評家たちは、イシグロの初期の作品について、その登場人物の名前などから、「ジャパニーズネス」の要素が濃いと評価

臺灣大學學術期刊資料庫

してきた。しかし、その「ジャパニーズネス」の具体的な内容が明かされていない。また景子の死を川端康成や三島由紀夫などと結び付け、日本人は腹切り（Harakiri)、自殺の民族だ、というステレオタイプの説も残されている。

一方、日本では平井杏子は、イシグロの描いた長崎と当時の長崎の風景を比較し、それを「ジャパニーズネス」としている[11]。また Ria Taketomi は、悦子と義理の父である緒方との関係は、川端康成『山の音』における嫁と舅との関係と類似していると述べている[12]。そしてそれがこの作品の「ジャパニーズネス」だという。氏のこのような説は、イギリスの批評家たちの論点をふまえたものである。

しかし、物語での悦子と緒方の関係には、『山の音』で描写されているような淡い恋情は見られない。また単純に登場人物の設定から、イシグロは川端康成の影響を受けているとは言い難いであろう。とはいえ、英/米の批評家のいう「ジャパニーズネス」は、イシグロの作品でいかなる形で描出されているのか。たとえば、悦子と二郎の婚姻生活に着目すれば、悦子は夫に従順で、義父を尊敬する婦徳を尽くしようとする妻像が提示されている。一方、二郎は亭主関白な姿も示唆される。二郎はまじめな会社員であり、昇進にかかわる発表会のため、家で着替えるとき、「今日は黒いネクタイをするつもりだったんだが、きみがどっかへやったろう。ぼくのネクタイはいじらないでくれよ」と、悦子に不機嫌な顔を見せる。また、発表会の成功に緒方と祝うシーンで、悦子は「おめでとう」と言って、「夫ににっこりした」が、「二郎は、はじめてわたしに気がついたように顔をあげた。「なんでそんなところに突っ立ってるんだ。お茶くらいいれてくれたらどうだ」」と不満げに言う（218 頁)。これは悦子が妊娠中のシーンであり、ここからも夫婦関係の一端がうかがわれる。

しかし、なぜイシグロは、わざわざ二郎をステレオタイプふうな

[11] 平井杏子（2017）「遡行するイシグロ」『カズオ・イシグロの世界』水声社、35-55 頁。

[12] Taketomi, Ria. ‘Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills* and Yasunari Kawabata's *The Sound of the Mountain*.’ “Comparatio.” 15, 2011, pp.8-18.

臺灣大學學術期刊資料庫

日本の夫像として描き出したのであろうか。イシグロがデビュー以来、英/米の批評家たちは、彼の「ジャパニーズネス」ばかりに注目してきた。イシグロはかつてつぎのように述べている。「ほとんどの批評家は日本文学に親しんだことがないにもかかわらず、私の独特のスタイルを評するのに、他に評語が見当たらないらしく、日本的とか」(『翻訳の世界』1988 年 6 月号) 言っているのだという。

『遠い山なみの光』で景子の死について、悦子は「景子は、ニキとはちがって純粋の日本人だった。その事実を書き立てた新聞は、一紙にとどまらない。イギリス人は、それ以上の説明はいらないとでもいわんばかりに、日本人には本能的な自殺願望があるという自分たちの見方に固執する」(9 頁) とすら語っている。したがって、景子の自殺行為も含め、イシグロはあえて作品で一般的に認識されている日本の伝統的な夫像を創出したのは、いままでの批評家への反発やアンチテーゼのひとつだと考えられよう。換言すれば、そうしたイメージを打破するため、イシグロは意識的にそうした夫像を描き出したのではないだろうか。

イシグロはこの作品で悦子と万里子の人物造型に焦点をあてた。悦子と景子母娘は、まさしく終戦後日本のアイデンティティの構築過程に揺らいでいるのではないか。悦子の場合、強制的に子どもをつれて日本から脱出したことの正当性に悩む。日本人として異国で暮らすなか、子どもを死に追いやったことへの後悔の念は、彼女の一生のトラウマになろう。そして景子の越境は、戦後のよりどころがない不安定感に、日本のアイデンティティの揺れが加えている。こうして、物語の重層化したかすかさの反照という創作手法こそが、この作品の「ジャパニーズネス」を構築したものなのではないだろうか。

六、おわりに

以上のように、終戦後日本にいる悦子と景子はそれぞれ、過去の影に直面しなければならない。ここでの過去に戦争という影が大き

臺灣大學學術期刊資料庫

く落とした。悦子の回想に出てくる佐知子、および東京の事件の女性は、すなわち悦子の過去の失敗と闇の象徴だと明らかになった。万里子と重ね合わされた景子は､戦争のトラウマをかかえたうえに、異国で日本のアイデンティティ形成に彷徨い、家もなく当てのない漂流生活を終える。物語の構造の深層に人物造型の多層性がかすかに反照される『遠い山なみの光』の創作技法は、カズオ・イシグロの「ジャパニーズネス」を構築したものだと言えよう。

【参考文献】

平井杏子（2011）『カズオ・イシグロ――境界のない世界』水声社、15-43 頁

平井杏子（2017）「遡行するイシグロ」『カズオ・イシグロの世界』水声社、35-55 頁

小池昌代・ほか（2017）『カズオ・イシグロの世界』水声社

斎藤兆史（2003）『英語達人塾――極めるための独習法指南』中公新書

荘中孝之(2018)「記憶の奥底に横たわるもの――『遠い山なみの光』における湿地」『カズオ・イシグロの視線』作品社、13-34 頁

臼井雅美（2019）『カズオ・イシグロに恋して』英宝社

李有成(2008) ‘Reinventing the Past in Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills*’、『長庚人文社會學報』1、19-32 頁

Beedham, Matthew. “The Novels of Kazuo Ishiguro.” London: Palgrave Macmillan, 2010.

Mason, Gregory. ‘An Interview with Kazuo Ishiguro.’ Shaffer, Brian W., Wong, Cynthia F. ed. “Conversation with Kazuo Ishiguro.” UP of Mississippi, 2008, pp.3-14.

Matthews, Sean., Groes. Sebastian. ed. “Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives.” London: Continuum, 2009, pp.114-125.

Shaffer, Brian W. “Understanding Kazuo Ishiguro.” Columbia: University

臺灣大學學術期刊資料庫

of South Carolina Press, 1998.

Sim, Wai-chew. “Globalization and Dislocation in the Novels of Kazuo Ishiguro.” New York: Edwin Mellen Press, 2006.

Taketomi, Ria. ‘Kazuo Ishiguro's *A Pale View of Hills* and Yasunari Kawabata's *The Sound of the Mountain*.’ “Comparatio.” 15, 2011, pp.8-18.

Teo, Yugin. “Kazuo Ishiguro and Memory.” London: Palgrave Macmillan, 2014.

Walkowitz, Rebecca L. “Cosmopolitan Style: Modernism beyond the Nation.” New York: Columbia University Press, 2006.

Wong, Cynthia F., “Kazuo Ishiguro”. 2nd ed. Northcote, 2005.

Wong, Cynthia F., Yıldız, Hülya. “Kazuo Ishiguro in a Global Context.” Surrey: Ashgate, 2015.

臺灣大學學術期刊資料庫